

氏 名 大内 瑞恵

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1403 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 近世前期朝廷とその周縁の文事－後陽成天皇八宮良純
入道親王を軸として

論文審査委員 主 査 教授 寺島 恒世
教授 武井 協三
教授 渡辺 浩一
名誉教授 渡辺 憲司 立教大学
教授 楠元 六男 都留文科大学

論文内容の要旨

〈江戸期 和歌における堂上と地下〉

宮中に殿上を許された者を堂上といい、許されない者を地下という。歴史学研究においては「地下人・地上家」を、昇殿を許されていない官吏・官人とし、貴族の身分の一つとしているが、文学研究においては官吏・官人に限らず広く町人階層の歌人を地下歌人と称している。

江戸前期堂上の和歌研究の進展とともに、地下歌人の和歌研究は、上野洋三氏『近世和歌撰集集成』(明治書院、1985)、日下幸男氏『近世古今伝授史の研究 地下編』(新典社、1998)などにより近年、研究が進行しつつある分野である。稿者は修士論文において『近世前期地下歌人の研究』として、元禄期に活躍した京都の地下歌人河瀬菅雄について研究した。

江戸前期地下歌人たちの資料を見ると、彼らが毎月集まって月次歌会を行っている記録が散見する。宮中の歌会始で披露された和歌を巻頭に置き、同じ題で歌を詠み合うことも多い。前述の河瀬菅雄は実にまめやかに歌会を行っている。その資料は現在大阪大学含翠堂文庫に残っているが、彼ら地下歌人たちの視界には常に堂上の和歌があった。

また、国学の先駆者ともいわれる下河辺長流の『林葉累塵集』においてさえ、その序文において「たかきいやしきをわかずあまねき勅撰あるべき時にこのしふのちりほひのこれるをもしもみそなはして読人しらずのあらん中に一首にてもえらびあげられれば」と記している。勅撰集が撰ばれるときにこの集から(地下であるので)詠み人知らずの一首として撰ばれれば、と天皇の勅による国家事業である勅撰集を意識している。

一方、江戸時代の天皇をはじめ、宮門跡・公家衆も年頭の歌会始から年末にいたるまで、歌会をまめやかに行っている。それは、天皇主催の御会、上皇主催の仙洞御会、七夕、重陽などである。後陽成天皇・後水尾天皇・霊元天皇など歴代天皇によってそのシステムが整えられていった。

近年、研究が進みつつある堂上歌人の「加點資料」(和歌添削資料)であるが、これらが多く残るのは、ひとえにこの歌会のために研鑽をつんだ記録である。

天皇・宮門跡・公家衆はなぜ歌を詠んだのか。歌会があるからである。

もちろんそれが全てではないが、晴れの日として歌会が重要であったことは間違いないであろう。『公宴続歌』(明治書院)で紹介された御会はほんのひとにぎりである。江戸時代の堂上和歌を知るためには、練習過程である和歌添削資料も重要だが、その成果としての御会研究が今、必要となっている。

朝廷復興の大事業として御会は行われた。和歌が好きな天皇・宮門跡・公家にとっては活躍できる時代の到来である。しかし、歌会は参加しなければならない義務であったのも一つの側面である。天皇や皇族の中には後光明天皇・妙法院宮堯恕親王のように和歌より漢詩文を好んだものもいた。しかし、月次歌会はともかく、歌会始は宮廷の重要な行事の一つとして参加することになる。

〈本稿の意義と内容〉

〔第一章〕

本稿に取り上げる良純入道親王(慶長八年〈一六〇三〉～寛文九年〈一六六九〉)は後陽成天皇の八宮であり、すなわち後水尾天皇の弟であり、徳川家康の猶子となり初代知恩院宮となった人物であ

る。

この良純入道親王は寛永二十年（一六四三）、突如、甲斐に配流される。帰京が許されたのは万治二年（一六五九）であった。

〔第二章第一節〕

この寛永二十年という年は同時に、徳川家の血筋を引く女帝・明正天皇が退位、後光明天皇が即位した年でもある。後水尾院は宮中和歌の伝統を引き継ぐべく、早くから皇太子（後光明天皇）の教育を始め、和歌を着実に宮中行事として確立していこうとしていた時期である。

〔第二章第二節〕

その一方、宮門跡や公家達は数多くの書を書いていた。配流の前も、配流の最中も、配流の後も、良純入道親王は多くの書を残すこととなる。白身は歌をあまり詠まないが、まるで職業のように色紙・短冊・扇面などへの揮毫を望まれる。また書家として『源氏物語』や『伊勢物語』の写本を行う。当時の宮門跡・公家衆はまるで家内制手工業のように写本を作っていく。ここに、当時の一般的な宮門跡・公家衆の活動を垣間見ることができよう。

〔第二章第三節〕

良純入道親王は具体的にどのような書を残したのか。

彼の書は配流地の甲斐に限らず、蒐集家の手によりさまざまに流通したようである。もっぱら、古歌短冊が中心である。また、甲斐においては、『和漢朗詠集』などが知られている。

『伊勢物語』の写本も多い。『伊勢物語』と短冊コレクションで知られる鉄心斎文庫の芦沢新二氏は山梨県出身であったこともあり、良純入道親王書『伊勢物語』を蒐集、所蔵しておられた。甲斐・山梨においては、良純入道親王は「八宮さん」として愛され、知られていた。では、なぜ写本は何冊も作られたのか。その背景には、前述の「宮門跡・公家」の短冊・色紙・写本の製造・流通システムがある。

〔第三章第一節〕

良純入道親王は、和歌・漢詩文よりもほかの分野を好んだらしい。その立場は和歌に無関係ではいられないはずであるが、積極的に関わった痕跡は薄い。歌会の参加も非常に少ない。それにもかかわらず、「親王は歌を詠むもの」という庶民の思い込みは親王に関する和歌伝承を生み出していく。

〔第三章第二節〕

良純入道親王は何を好んでいたのか。その事蹟は地下の記録に残ることとなる。寛文六年（一六六六）刊行『古今夷曲集』や『後撰夷曲集』など生白庵行風は、良純入道親王を地下の狂歌に対する理解者として顕彰していく。

〔第三章第三節〕

芸能分野において筑紫箏曲の継承史にも良純入道親王の名が登場する。後に、筑紫箏曲の伝書では「投節」の作者にさえ擬せられることとなる。

庶民の風俗を好み、配流される悲劇の入道親王。ここに浮かび上がるのは、和歌を中心とする堂上歌壇と、そこに属さず周縁、特に地下の文化と係わっていった親王の姿である。堂上と地下を結ぶものがここにあるといえるのではないだろうか。

本稿は、この良純入道親王の事蹟をたどることによって江戸期における朝廷と地下との関係をみるものである。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、近世すなわち江戸時代の前期の朝廷における文事について、後陽成天皇八宮の良純入道親王を中心に据えて考究するものである。

朝廷の文事については、中世以前においては豊富な研究成果の蓄積があるのに対し、近世以降は、部分的な解明は進みつつあるものの、未だ総合的な研究はなされていない。部分的な解明とは、具体的に後水尾天皇を芯とした文化サロンを対象とするものであるが、その弟の良純入道親王に注目した研究はこれまで皆無であった。この親王を取り上げ、徳川家康の猶子となりながら、事あって配流の身となったことにより、宮廷（堂上）と庶民（地下）との間に果たした役割を追究しようとするテーマを設定したことは、有益な成果を期待させるもので、この新たな視点の導入がまず評価される。

先行する研究のない一個人の文事全般を視野に収めるこうした研究は、効率的でない膨大な調査が要求され、具体的にその活動を把握するため、同時代の公家や僧侶の日記等の博搜が求められる。本論文が最も大きく評価されるのは、基礎的で労多き地道な作業を継続し、よく努力して良純入道親王の活動の全貌を解明したことである。とくに『隔莫記』をはじめとする同時代資料から多くの関係記事を抽出したことは、本論文の優れた成果である。40頁にわたる「良純入道親王年譜稿」は労作であり、今後の研究の基盤を提供するものとなっている。また良純入道親王の文化活動の中心をなすものとして諸種の揮毫が上げられるが、その遺墨類のリストや、書写資料のリストを写真を添えて提出したことも、今後の研究に益するところが大きい。

本論文は、良純入道親王の文事に関する文献資料の調査をほぼ尽くしており、さらに伝承資料にも着目しているところが、大きな特色となっている。すなわち、第三章第一節で論述されている「この里過ぎよ山ほととぎす考」において、筆者は、ここに「親王は歌を詠むものという庶民の思い込み」を指摘し、それが「親王に関する和歌伝承を生み出していく」と捉えている。この見解は、なお詳述すべき余地を残すものの、結論としては妥当で、文化と伝承という大きな問題解明の端緒をはらむものとして評価できる。

論文中には、「第二章第二節 短冊の流布」「第三章 寛文四年の彗星」巻末付録の「参考資料 御会和歌年表」など、論旨にとっては一見周辺事象と思われる部分がある。ただし、その周縁の事からは、良純入道親王の時代の文化背景をなすものと明快に位置づけられて論述されており、本論文に広がりや深みを与えている。

こうした考察を経て、筆者は良純入道親王が果たした役割を「文化の仲介者」とであると結論する。この結論は、堂上と地下、文学と芸能といった領域の境界に良純入道親王を位置づけるものであり、近世初期の宮門跡のありようを具体的に解明し、その時代の文化的・文学的特色の一つを明快に抽出したものとして、高い評価を与えることが出来る。

以上のような価値を有する論文ながら、若干の欠点及び今後の課題も指摘しておかねばならない。

各章ともに豊富な資料を示すものの、それに対する著者の考察、追究には物足りないところが散見される。例えば良純入道親王の配流の理由に対しては、諸説を紹介しているが、筆者の考えが必ずしも明示されているとは言い難い。また、各章で取り扱った内容が有機的に関連していない面が見られること、研究史との関わりの示し方がやや弱く、総じて巨視的な視点を欠く嫌いがあること等も問題となる。

ただし、これらの課題は、未知の領域の解明に向け、精力的に取り組む姿勢を示す筆者が今後解決することが見込まれるものであり、ここに、良純入道親王という、我が国文化史上注目すべき興味

深い人物を研究対象に据えて、その資料を博搜・紹介しながら考察を加え、その文化的・文学的意義を指し示した本論文は、学位授与に値するものと認められる。